

武部勤のアジアの未来図



武部 勤氏 略歴

前衆議院議員(8期)。農林水産大臣(第33代)、自由民主党幹事長(第39代)、衆議院議院運営委員長(第63代)を歴任。

議員時代にベトナム友好議連会長、インドネシア友好議連会長、メコン友好議連会長、モンゴル友好促進議連会長、パレーン友好議連会長を務めたほか、今年3月1日には社団法人日本ベトナム経済フォーラムの名誉会長に就任するなどアジアを中心とする諸国との友好に尽力。このほど一般財団法人「東亜総研」を設立し代表理事に就任。

日越大学の設立でアジアに絆を

編集部より新連載のお知らせ：武部勤氏は衆議院議員時代、ベトナム友好議連会長、インドネシア友好議連会長、メコン友好議連会長そしてモンゴル友好議連会長などを歴任するなど、アジア諸国との友好に尽力してきたことで知られます。とくにベトナム政府との関係は深く、このほど日越友好に大きな貢献があったことが賞され、本国最高位の勲章である「友好勲章」を授与されました。

政界からの引退後も、社団法人日本ベトナム経済フォーラム名誉会長としての活動に加え、一般財団法人「東亜総研」を設立し代表理事に就任。アジアが経済・政治双方で重要性を増すなか、政・官・民が連携する「オールジャパンによるプラットフォーム」を目指し精力的に活躍中。当コーナーでは、議員時代の経験そして現在の活動を通じて、武部氏が描く現実的かつ夢のある「アジアの未来図」を紹介します。

先月、政治局員で越日友好議連会長のルア氏が訪日し、安倍晋三内閣総理大臣らと会談された。本年は外交関係樹立40周年となる「日越友好年」にあたり、両国の友好がさらに深まることを期待したい。

ベトナムの魅力は数えあげればキリがない。まず人口が9,000万人を超えながらも、平均年齢27歳という非常に若い国であるということ。文化的にも日本と通じるものがある。

そして何より日本人と肌合いが合う。私とベトナムとの付き合いは20年を超えるが、常に実感することだ。

実際、日本とベトナムはここ最近でもっとも息のあった二国間関係を構築していると言える。日本企業の進出が増加しているのも当然だろう。

この若くてエネルギーに溢れる国の発展と友好関係の深化を目指して、早期実現に力を入れている計画がある。それが「日越大学構想」だ。

日越大学構想の誕生経緯

まず構想が生まれた経緯について紹介したい。

2005年、日越友好議連に対しグエン・タン・ズン首相から「新幹線、高速道路、ホアラック・ハイテクパーク(ハノイ市)の建設」いわゆる「三大案件」について協力要請があった。

私の跡を継いで現在会長となられた二階さんが座長となり検討するなかで「ベトナム側からハイテクパークに日本企業の進出を期待する旨があったが、相応に高度な知識を持つ人材がいなくてはならない。日本語や英語も学ぶことができるカレッジを作る必要がある」という議論となり、教育機関の設立の提案と3大案件のサポートを決定した。

2006年、安倍首相とズン首相による「戦略的パートナーシップ」を目指す共同声明のなかで3大案件のひとつとしてホアラック・ハイテクパークが盛り込まれ、私の日越大学実現に向けての活動が始まったわけだ。

自民党幹事長時代、グエン・ティエン・ニャン副首相(当時は教育訓練相も兼務、今年5月11日に政治局員に就任)からも「今、独越大学の建設に着手しているが、日本語に堪能な人材も育てたい。武部さん、ぜひ日本の大学をベトナムに作って欲しい」という言葉をもらい勇気づけられたものだ。

今年3月以降、ベトナムではチュオン・タン・サン国家主席やルア会長と会談を行い「2013年は日越外交関係樹立40周年だから、その目玉事業となるようにお互い努力しましょう」と訴え、好感触を得た。

日本でも政府のバックアップを得るため岸田文雄外務大臣(日越友好議連幹事長)をはじめ下村博文文部科学大臣や菅義偉官房長官等にも説明し、今年12月に行われるであろう安倍・ズン両首相の会談において議題となるよう働きかけを進めている。

小泉純一郎元首相から紹介されたレコフグループの吉田允昭代表との出会いもあった。吉田代表は日本ベトナム経済フォーラムの常任理事として共に

日越大学の実現に向けて努力している同志である。

日越大学とは何か

ここで日越大学構想について具体的に紹介したい。

基本構想は①日本語教育をベースとしながら英語を併用することで、日本から教授・専門家の派遣を容易にするとともに日本企業への人材供給を増やす②基礎教養を基本に据え、先端的専門分野の発展に寄与する③教育と研究の一体化を図り、研究活動から講座内容まで企業との連携を図る、というもの。

スケジュールとして3年後の開校、10年後をめどに理工系だけでなく医療・看護・介護、農水、日本科、法律、経済・経営の各分野を揃える総合大学とし、6,000人の学生(うち大学院生2,400人)の規模とすることを目指している。

すでに今年1月、JICAよりオリエンタルコンサルタンツ、日本国際協力センター、日本ベトナム経済フォーラムの3者が日越大学構想のための基礎的調査を引き受けており、年末には成果を提出する計画であるなど、着実に実現に向け進んでいる。

ホアラック・ハイテクパークをアジアの「シリコンバレー」に

建設予定地は、紆余曲折あったもののホアラック・ハイテクパーク内に決まりそうだ。私がパーク内での建設に拘ったのは、インフラが整っていることなど実利的な理由もあるが、何よりアメリカのシリコンバレーが頭にあったからだ。

周知の通りシリコンバレーはスタンフォード大学から誕生し、同大学を中心に発展していった。ホアラック・ハイテクパークはまさにアジアのシリコンバレーともなるべき存在。その中心に日越大学が存在するのは当然だと考えた。大学とパーク入居企業は密接な関係を持つ

べき、というのが計画のベースとしてある。

もうひとつのベースとしては、学生に対する学費や留学費用、就職面など篤い支援を行う、というものがある。これはベトナム、そして周辺アジア諸国の貧しい学生にも広く教育を受ける機会を与えようという考えから生まれた。

日本は敗戦後、現行憲法を施行し多くの物事を変えた。そのなかでもっとも良かったと思えるのは、教育の機会均等がなされたことだ。寒村の出身でも、努力すれば良い大学に入り国を、企業を動かすことができる。私事で申し訳ないが、私が北海道の辺境の町に生まれ育ち、落選などの挫折を味わいながらも大臣や自民党幹事長までなれたことも教育を受けることができたからこそ。

日本が敗戦後のどん底から目覚ましい経済発展を果たした原動力となったのは教育の機会均等であったように、アジアにおいてもそれは同じはずだ。

アジアは世界の成長センターと言われるけれども、教育の実情を見るとまだまだ満足できる状態にはない。

これは何故ベトナムそしてハノイに「アジアのハーバード大、スタンフォード大」を作るのか、という話にもつながる。

世界に名門校と呼ばれる大学は数あれど、あまりに欧米に偏り過ぎている。アジアにも東京大学、北京大学、シンガポール国立大学など有名校はあるが、世界大学ランキングなどで見ると下位ランクにあるのが現実。事実、ベトナムにおいても政府高官の子弟の多くが欧米の大学に留学し、帰国後あらゆる分野で活躍の機会を得ている。しかし欧米に留学できるベトナム人学



このたびベトナム国大統領より友好勲章を授与された。
右はトー・フィ・ルア政治局員(越日友好議連会長)

生は当然のことながらごく稀であり、多くの学生は個人の努力や才能のいかんにかかわらず諦めなくてはならない。おそらく多くの優秀な人材が無為に眠っていることは想像に難くないわけだ。それではベトナムは経済成長できないし、共に発展しようとする日本にとってもマイナス。

実はベトナムでは、独越大学(開校済み)、仏越大学(ホアラック・ハイテクパークの一角で進行中)、そしてこの7月末にオバマ大統領とサン国家主席が会談し米越大学の建設で合意する、といった動きが進んでいる。

喜ぶべきことではあるが、すべて欧米系であり、やはり「アジアのハーバード」はアジア人主導でつくりたい、というのが私の想いなのだ。

日本の学生にもどんどん留学して欲しいという想いもある。これからの日本は今まで以上にアジアと共にあるべき、和合すべきだ。

日越大学を出たアジアの学生達がそれぞれの国で活躍し、日本人学生は企業で活躍し経済発展に寄与する。アジアの友人も多くできるだろうし、そうした関係が将来のアジアをつないでくれるだろう。

「世界に類のない大学をつくりたい」というのが私の夢であるが、すでに単なる夢ではなく実現に向け進みつつあるのだ。